

石神遺跡の調査 - 第114-1次

1 はじめに

この調査は水路の改修にともなう事前調査として実施したものである。調査地は石神遺跡の想定される範囲内で、1988年に実施した石神遺跡第8次調査地の東に接する位置にあたる。調査区は南北32m、東西約1.3m、北端付近で一部西に拡張し、8次調査区と重複させた。なお、調査区南端で東に張り出した地区については、後日の立会調査で掘削が遺構面に及ばないことを確認したため、発掘調査は行わなかった。

基本層序は上から順に盛土、灰褐色粘質土、黄灰色シルト、灰褐色シルト（地山）であり、黄灰色シルト上面で遺構を検出した。調査区西半は水田耕作によって削平されていたため、遺構面は東半に比べ低くなっていた。

2 検出遺構

石組溝SD332 調査区の南半及び拡張区で石組溝の底石や側石を検出した。本調査区の南にあたる石神遺跡第3次調査で検出された石組溝の延長部で、8次調査の拡張区でも検出されている。内法幅は80cm前後と推察でき、3次調査とほぼ同規模である。時期は3次調査では斉明期（7世紀中頃）、8次調査では天武期（7世紀後半）と考えられている。本調査では後述するSD1349との重複関係を確認し、これより新しいという知見を得ることができたが、調査範囲が狭く出土遺物も少ないため、時期の確定については今後の課題としたい。

SD1349 東西方向の素掘溝。幅約45cm、深さ10～20cm。溝底は東に向かって浅くなり、調査区より更に東に延びる。8次調査で検出した斉明期（7世紀中頃）の東西棟建物SB1350の北雨落溝と考えられている溝の東延長部で、SD332に先行する。

SD1431 調査区の南端で検出した南北方向の素掘溝。幅35～60cm、深さ約45cm。8次調査でも検出されているが、時期は不明。埋土から7世紀代の土器が出土。

SB1430 掘立柱建物SB1430の北柱と考えられる柱の掘形を一部検出した。掘形は南北1.2m、深さ約35cm。8次調査と合わせ南北5間、東西2間分を確認したことになる。時期は不明。（加藤貴之／（財）印旛郡市文化財センター）

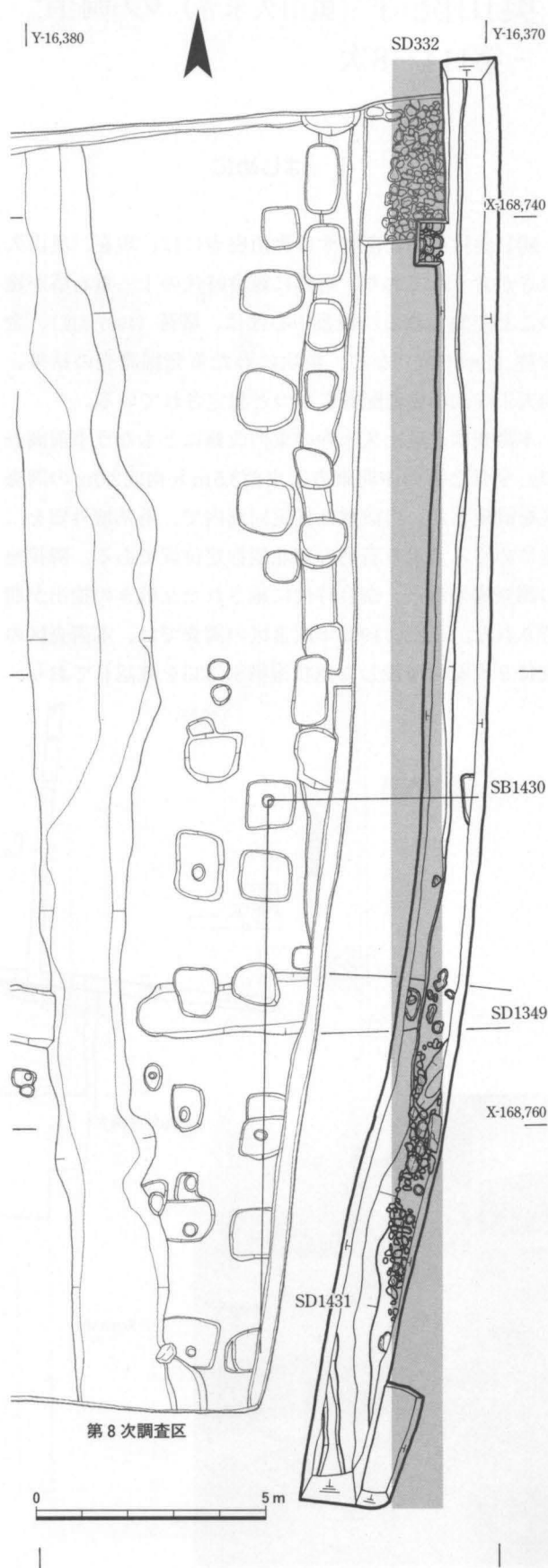


図79 第114-1次調査遺構平面図 1:150